

I 青谷上寺地遺跡第 20 次発掘調査概要報告

門脇 隆志・高橋 章司

1 調査の目的

青谷上寺地遺跡では史跡内の内容確認調査を継続しており、令和 4・5 年度に中心域の東端で第 20 次発掘調査を実施した。調査区は平成 12 年度に第 1 次発掘調査が行われた県道 8 区の北側に位置している（図 1）。県道 8 区は、弥生時代後期から終末期に構築された溝状遺構 SD38 が検出され、弥生時代後期後葉の土器を伴う SD38-2 から約 5,300 点（最少個体数 109 体分）にも及ぶ人骨が出土した重要地点である（(財)鳥取県教育文化財団編 2002）。第 20 次発掘調査は、これら人骨群の再評価を主目的として実施した。

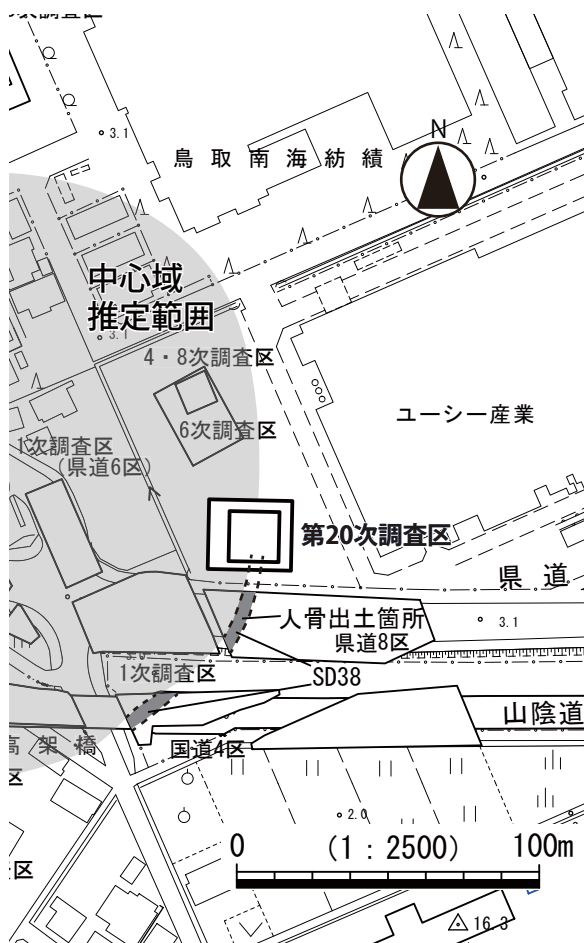


図 1 調査区の位置

2 基本層序と調査成果の概要

(1) 概要

上層から順に中世前期から幕末に営まれていた水田跡や道路跡、律令期の自然流路、古墳時代前期前半期の建物跡を中心とする遺構群を確認した。その下層の弥生時代後期から終末期の遺構面において、SD38 の延長を検出した。調査の結果、造成による中心域の東側縁辺部の拡張に伴って、SD38 が西から東に位置を変えながら変遷する様子を確認した。そして、弥生時代後期後葉段階の SD38 (SD38 - C) において、第 1 次発掘調査のものと一連の人骨群を検出した。

(2) 基本層序

調査区南壁を中心とする土層断面の検討から、現代の造成土下に、以下の大別層を確認した（図 2）。

- I 層 石組みの暗渠より上層の水田耕作土。明治 20 年代以降。
- II 層 石組みの暗渠以下の水田耕作土。近世～近代初め頃。
- III 層 中世後期から近世初頭の水田床土とみられ、黄褐色系の擬礫を多く含む。
- IV 層 中世の耕作土である IV - 1 層と、自然堆積とみられる砂層の IV - 2 層に細分される。基本層序としては捉えられなかったが、IV - 1 層は複数の微細な砂層を挟む。
- V 層 律令期の湿地堆積。層相から V - 1 ～ V - 4 層の 4 層に細分される。
- VI 層 古墳時代中期後葉のシルト質土。中心域側に多く遺物を包含し、中心域から流入したものと考えられる。

Ⅶ層 古墳時代前期の土壌層。土器片をはじめ大量の遺物を含む。

Ⅷ層 SD38の基盤層であり、弥生時代後期以前と想定される。

3 古墳時代前期前半期までの調査

以下、古墳時代前期前半期までの主要な遺構について、上層から検出面ごとに記述する。面的な調査を行った範囲は図3のとおりである。

(1) IV - 1層下面の遺構 (図4、写真1)

4土手と2畦畔を検出した。両遺構の構築年

代は、IV-1層から出土した青磁や土器の年代から13世紀とみられる。

4土手は頂部がⅡ層掘削時に検出されていることから、近世末頃まで機能していたと考えられる。また、近世末には中央部に水路が掘り込まれていることが判明した。当調査区周辺を描いた天保年間の田畑地続全図には、4土手とみられる道が、水路とともに描かれており、字境となっていたことが確認できる。

2畦畔は方向性が異なる新旧2段階があるが、いずれも4土手にほぼ直角に接続する。

4土手で東側を、2畦畔で南側を区切られ

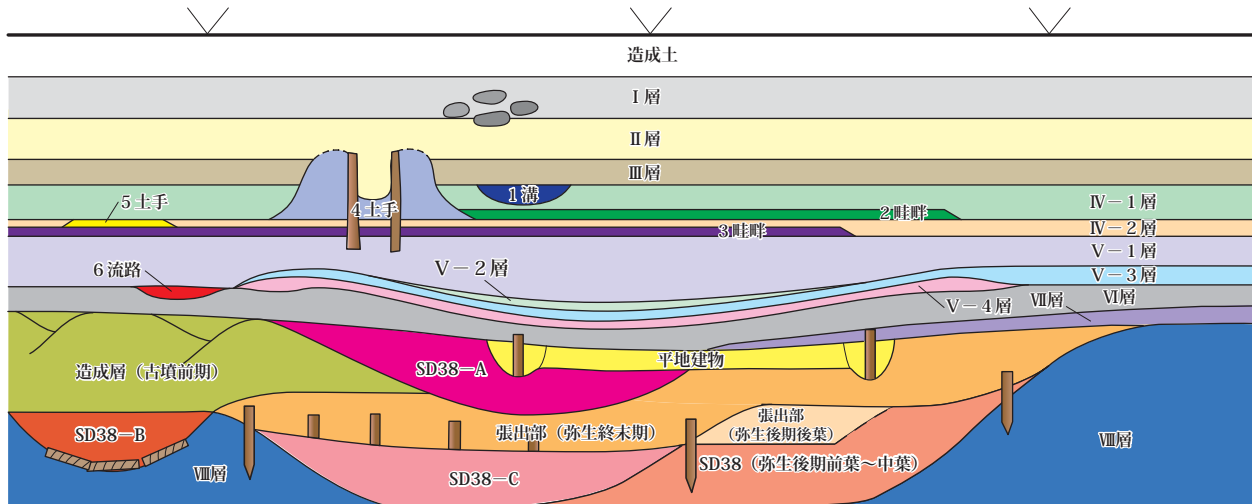


図2 基本層序概念図

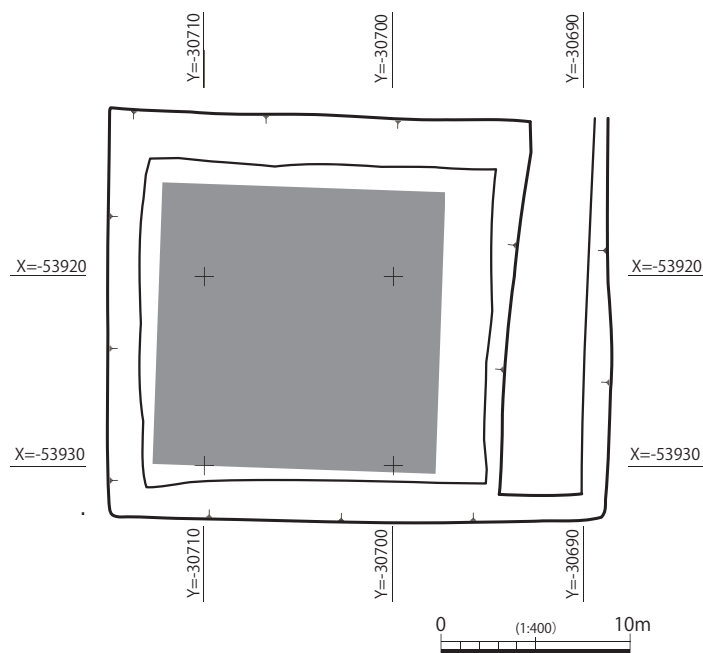


図3 平面調査範囲

る水田区画内からは、IV - 1層を中心に計10点の宋銭が出土しており、水田に関連する祭祀で使われたものの可能性がある。

(2) V-1層上面の遺構(図5、写真2)

4土手及びIV - 2層下で、V層を基盤として構築された3畦畔と5土手を検出した。両遺構はほぼ直交し、水田区画を形成する。

3畦畔の基部には枝が敷きならされており、芯材と考えられる。これに重複する5土手は被熱によって赤褐色を呈し固く締まった粗砂から細礫を主体として構築されているのが特徴的で

あり、道跡と考えられる。

両遺構で区画される水田床土下から出土した土器から、これらの構築年代は11世紀代と判断できる。基盤層のV層は湿地環境下の自然堆積であるため、当調査区周辺は同時期から水田として利用され始めたと考えられる。

(3) V層中の遺構(図6、写真3)

律令期の流路である6流路を検出した。湿地堆積とみられるV層の形成とあわせ、当調査周辺での人間活動が低調であったことが窺える。6流路の底面から出土した人形(写真3)は脚

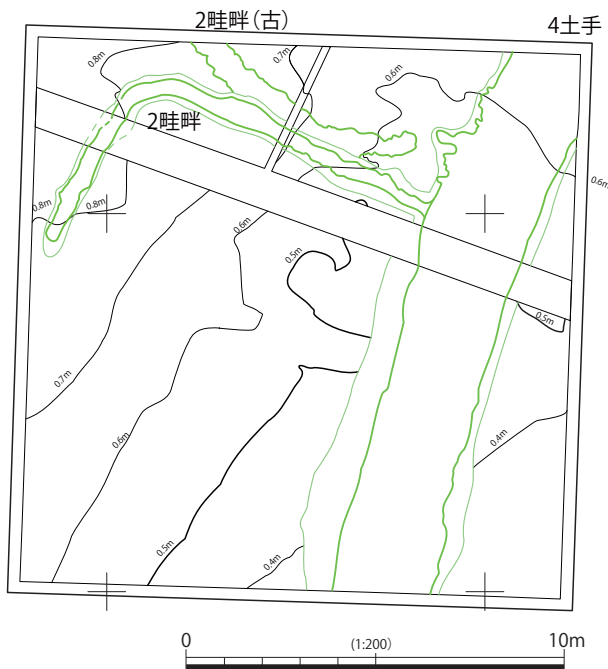


図4 IV-1層下面平面図(中世前半期)

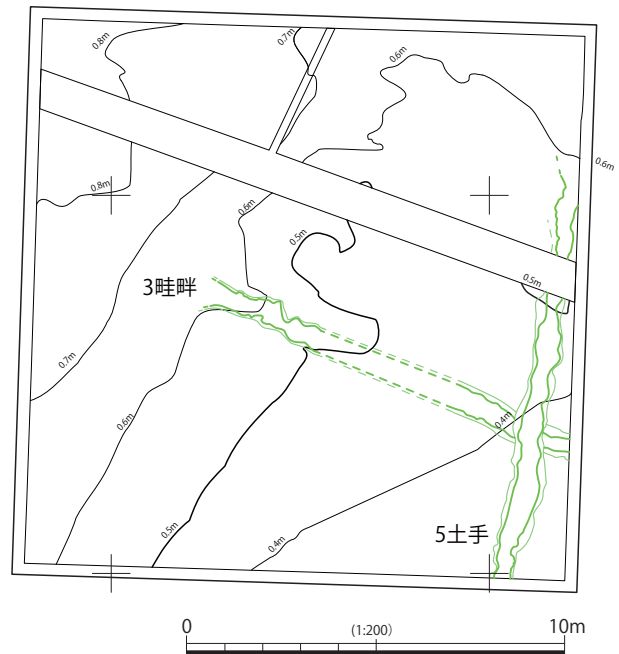


図5 V-1層上面平面図(中世初頭)



写真1 4土手・2畦畔検出状況(北西から)



写真2 5土手・3畦畔検出状況(北西から)

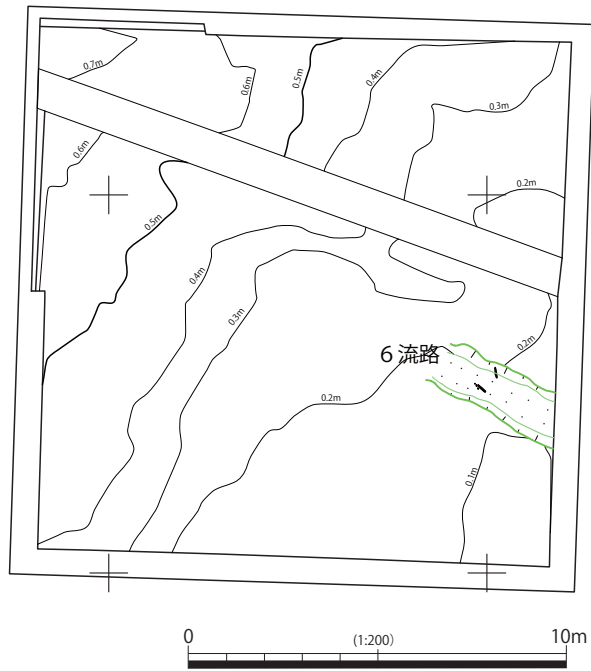


図6 VI層上面平面図（古代）



写真3 6流路人形出土状況

部が底面に突き立てられた状況で検出されており、使用時の状況を留めていることが特筆される。

(4) VII層下面の遺構（図7、写真4～6）

古墳時代前期前～中期後葉の遺構を検出した。特に、平地建物を中心とする古墳時代前期前半期の遺構群（図7）は、造成によって拡張された中心域縁辺部の当該期の利用状況を示すものとして特筆される。平地建物1～3は、いずれも方形に掘削した溝の中に柱や壁を立てる壁立方式の建物である点は共通しているものの、構造には差異も認められる。平地建物1は屋内に炉を備えるのに対し、平地建物2は建物



写真4 平地建物2



写真5 平地建物3



写真6 SD38-A

中央部の壁際に外側まで伸びる炉がある。平地建物3は大型の建物で、南側の壁が建てられたSD2が、主屋のプランからはみ出すことから、東側と西側に庇がつく構造であったことが分かる。また、主屋内で検出されたSD5には横板

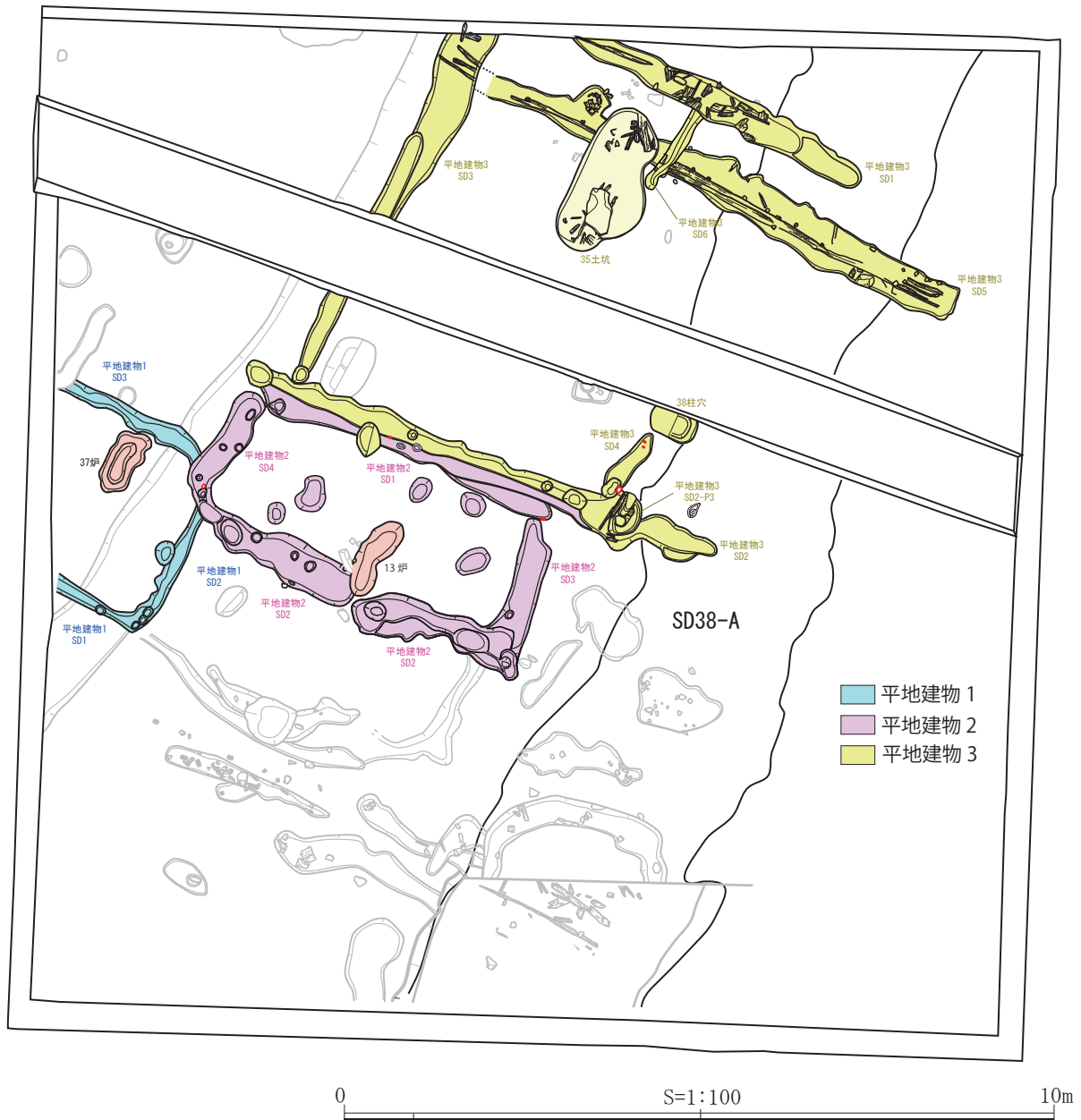


図7 VII層下面平面図（古墳時代前期前半）

を杭で固定した土留が立てられており、構築に際して基礎を造成していたと推定される。平地建物3には、建物の部材が多く残存しており、南辺と東辺の接合部の主屋の四隅の柱穴であるSD2-P3では、長軸35cm、短軸15cmほどの分厚い角柱を、SD1では壁材であった横板を検出した。

平地建物2が平地建物1・3を切ることから、主軸を踏襲しながら、建物が複数回建て替えられたことが窺える。

当遺構面では、平地建物2・3に切られる南

南西—北北東方向の幅約4mの浅い溝状遺構を検出した。当初、位置と方向性からこれを、SD38を踏襲した溝と考えてSD38-A(写真6)とし、以後、当調査で検出したSD38の延長部については、検出した順にアルファベットを付して調査を進めることとした。ただし、調査の進展によって、このSD38-Aについては、溝として機能したものでなく、造成の工程あるいは、部分的な造成土の流出によって生じた一時的な窪地の可能性が高いと判断するに至った。



図9 SD38-C 平面図 (弥生時代後期後葉)

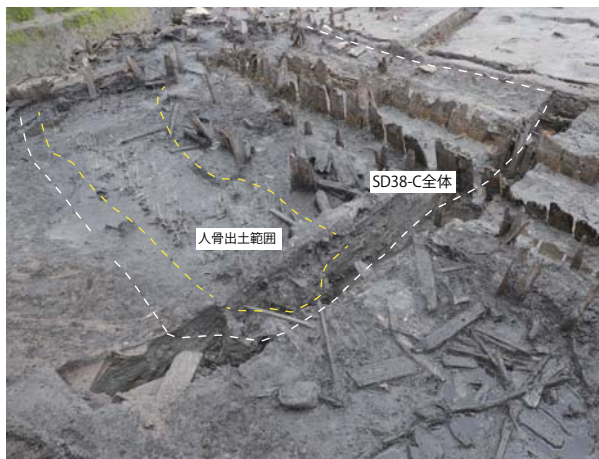


写真7 SD38 土層断面

4 SD38 の変遷

VII層および古墳時代前期の造成土下において、弥生時代後期後葉～終末期における造成による中心域の拡張と、それに伴う3段階にわたるSD38の変遷(SD38-B～D)を確認した。第1次発掘調査で大量の人骨が出土したSD38-2の延長にあたるのは、同じく弥生時代後期後葉の土器を伴い、西側の壁面が2列1組の矢板列で護岸されているSD38-C(図9)である。以下は、SD38の変遷について時系列に従って記述する。



図10 SD38 - B・D (弥生時代終末期)

SD38-Cは、幅は最大で7.0mを測り、西岸には中心域から延びる幅3m程度の張出部が設けられている。この溝本体が2/3～3/4程度埋まって残った後に生じた窪地に人骨が薄く堆積した(図9、写真7)。その後、弥生時代終末期には、張出部を拡張する形で、横板を杭で固定した土留を構築した上で遺物をほとんど含まない砂を用いて盛土を施し、方形区画を設けている(図10、写真8)。拡張は少なくとも2回行われており、当初は東側に2条、北側に2条の土留が設置された。この段階の張出部の規

模は、最大で幅11.4m、長さ7.0mを測り、その東側縁辺部に兩岸を矢板で護岸した幅0.5mの溝(SD38-D)が設けられていた。SD38-Dは水路として機能していたようで、調査区北東隅付近では、板で蓋がされていた。2回目の拡張では、SD38内を長さ605cmの梁や3枚の妻壁板転用した木材を土留めにした埋め立てた上で、さらに2条の土留(写真9)を設置しながら、張出部を約1.5m東側に拡張し、北辺は矢板を打って整えている。新たな拡張部は、最大幅2.6mを測る素掘りの溝(SD38-B)で3辺を囲み、



写真8 造成遺構検出状況



写真10 SD38-B 琴出土状況



写真9 造成遺構木製構造物検出状況



写真11 SD38-B 木器出土状況

その中には琴（写真 10）や木製高杯など、多数の木製品が集積していた（写真 11）。

なお、SD38-B・D、終末期の堆積からも人骨は出土しているが、散発的で SD38-C のようなまとまりがないため、本来 SD38-C に埋まっていたものが、張出部の拡張や溝の掘削により遊離したものとみられる。

5 人骨の出土状況と特徴について

第 20 次発掘調査は、人骨群の再評価を主目的としており、人骨を包含する土層、人骨の出土状況、共伴遺物のあり方、時期などを仔細に検討した。今回出土した人骨は約 400 点である（現在、整理作業中）。約 5,300 点の人骨が出土した第 1 次調査区と比べ、人骨の分布密度は低いですが、人骨の分布状況や層序などを正確に捉えることができた。先にも記したとおり、人骨が包含されているのは、SD38-C を埋める上

層部分に限られており、SD38-C の埋没が進み、深さ 20cm ほどの細長い窪地となった段階に人骨群が形成されていることを確認した。人骨は溝内全体に散乱しているように見えるが、動物の噛痕も殆どなく、包含する層に水の流れた痕跡もないことから、人為的に集積されたものとみられる。また、人骨の分布には、濃淡があり、人骨が集中するまとまり（単位）が観察できた。このまとまりの中には、大きさ、形状などの特徴から同一個体と判断できる骨が近接している状況も認められた（写真 12）。ただし、そのまとまりのなかで 1 個体の全身の骨格が揃っているわけではなく、解剖学的位置はほとんど保たれていない。さらに、部位の重複、年齢の異なる複数の個体に由来する骨が混在していた。このような出土状況は、SD38-C に埋まった人骨が、大部分の関節が外れ、白骨化あるいはそれに近い状態で溝に集積されたことを示す。人



写真12 SD38-C 人骨出土状況



写真13 幼児の骨



写真14 被熱した人骨

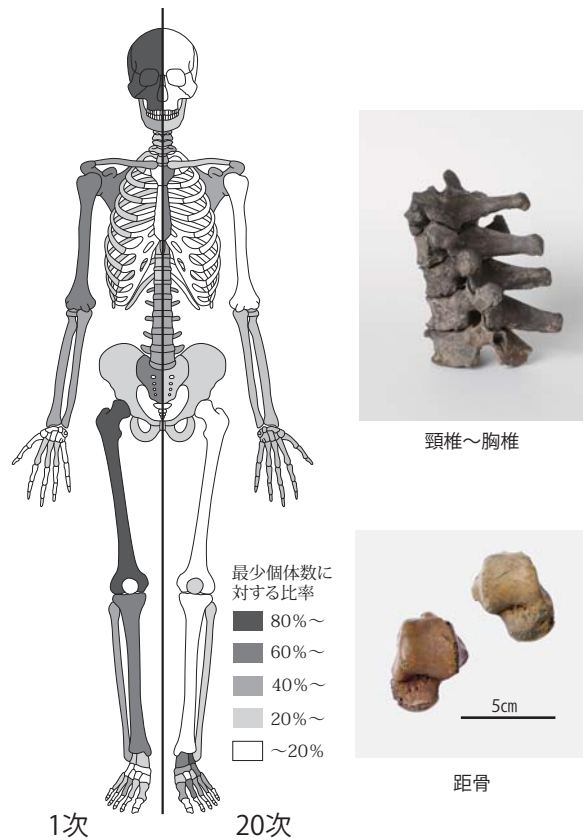


図10 人骨の部位別出土率

骨のまとまりは、その集積の単位を表すものと理解できよう。

また、人骨に伴う土器は後期後葉の土器であり、壺や甕は複合口縁が拡張し、多条平行沈線がその全面に施文される第V-3様式の新相を呈するものであり、紀元2世紀第3四半期頃に比定できる。人骨群の集積はこの時期に形成されたものと考えられる。

6 出土した人骨に関する所見

現在整理作業中ではあるが、第20次発掘調査で出土した人骨について、2つの所見を記す。1つは、幼児の骨（2歳から5歳程度の個体）が出土していることである（写真13）。第1次発掘調査では、SD38-2から大量の人骨が出土しているが、その中に幼児の骨は含まれていなかった（井上・松本2002）。置かれる場所等の死者の取り扱いが年齢によって異なっていた可能性を指摘できる。もう1つは、骨の部位の偏りが認められる点である。成人の骨については、椎骨のほかは踵骨、距骨といった短骨が多く、四肢の長管骨が少ない。特に、大腿骨については骨幹部から遊離した骨端が僅かに出土しているのみであり、完形の大腿骨が大量に出土した第1次調査との差が明瞭である（図10）。また、県道8区ではほぼ完全な形状を保つ頭蓋骨がたくさん出土しているが、本調査では出土した頭蓋骨は僅かな細片である。人骨を集積する際に、部位が選択されている可能性が考えられる。

7 おわりに

今回の発掘調査では、SD38-C（SD38-2）における人骨の限定的かつ特徴的な出土状況を明らかにした。なぜ、短期間にこのような形で人骨が溝に埋められたのか。今後、整理作業を通じて、骨に残された切痕や被熱痕等（写真14）の観察、第1次発掘調査で出土した人骨を含めた同一個体の把握などの作業を進めていく計画である。そして、この課題の解明こそ青谷上寺

地に生きた倭人たちの習俗や、彼らを取り巻く社会情勢を知る糸口となるかもしれない。

参考文献

- 井上貴央・松本充香 2002 「第1節 青谷上寺地遺跡から検出された人骨」『青谷上寺地遺跡4』
鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』